

## 知事と県民の意見交換会（雄勝地域振興局）議事要旨

- テーマ：私がそこに住む理由～「誇り」を持てるまちの話をしませんか？～
- 日時：令和3年7月9日（金）14：00～16：00
- 場所：西馬音内盆踊り会館

- 参加者：司会（トータルサポートスクールリード学舎）
  - A氏（株式会社 CRAS）
  - B氏（株式会社 鈴木又五郎商店）
  - C氏（株式会社 羽後麦酒）
  - D氏（元湯沢市地域おこし協力隊）
  - E氏（フリーランス フォトグラファー）
  - F氏（y a d o & k i s s a U G O H U B）

佐 竹 敬 久（秋田県知事）  
福 田 正 人（雄勝地域振興局長）

### 知事挨拶

平日で仕事がある中、参加いただき感謝申し上げます。市町村や農協、商工会等との会合によく行っているが、具体的な部分は、現場で実践する方が一番よく分かっているし、現場の生の声が一番大事だと思っている。ここに来る前には由利本荘で農業に関する話を聞いてきた。政策を作り、予算を付けるには、机の上だけで考えてはいけないため、このような会を開いている。

今日はまちづくりの話だが、そこに住む方々が、どのようなまちにしたいかという思いが相まって良いまちができる。

現在、新型コロナウイルスと、時代を変える幾つかのことが同時並行で起きている。情報革命、第4次産業革命といわれるように、先端技術により世の中や産業構造が大きく変わろうとしている。この後、どうなっていくか分からないが、どのように変わっていても、自分の住むまちは自分で作っていくことに変わりはない。

今回は日頃思っていること、今後の希望や夢について、忌憚のない意見を伺いたい。

### 司会による参加者紹介

（司会）

本日の流れは、まず私から参加者の皆様を紹介させていただく。次に、意見交換として、参加者の価値観についての話の後、休憩を挟み、その価値観について深められればと思う。

（A氏）

湯沢市出身・在住、株式会社 CRAS 代表取締役。

大曲農業高校卒業後、秋田県立農業短期大学に進学。その後、県内のスーパーマーケット勤務の中で、手をかけたらかけた分だけ、やればやった分だけ成果が上がるのが農業であるという思いを強め、志を共にする地域の若手農家の方々とともに、「三関果樹勉強会」

を立ち上げ、会長を務めている。「三関果樹勉強会」で生産しているサクランボは、楽天市場で毎年ベスト3に入るほどの品質の高さを誇る。

2011年、祖父、父の家業であった農業に従事し、約300年の歴史を持つ伝統野菜「三関せり」に着目。「需要があっても供給が足りていない」現状と年々減少する生産農家数に危機感を持ち、2019年に株式会社形態の法人を設立。「秋田県青年農業士」にも認定。会社は現在3期目に入り、セリ18棟、路地もの10a、枝豆50a、サクランボとリンゴが50aなどに拡大。現在は、地元野菜がメインの“きりたんぽに変わる鍋セット”の商品開発中。

農業を3Kから5K、つまり①こだわりのある農作物を作り、お客様の②興味を引き、そこには③感動があって、農家としてしっかり④稼ぐ。それをひっくるめて、⑤かっこいいにしたい、そして、子どもたちが将来の夢として農業をやると言ってもらえるよう日夜活動している。

### (B氏)

湯沢市出身・在住、株式会社 鈴木又五郎商店専務取締役。

湯沢高校卒業後、大学進学を機に上京。大学時代にスポーツ振興イベント等を主催、広告代理店でのインターンシップ等を経験。田舎での小さなコミュニティでの生活、密な人との関わり方が自分には合っていると感じ、将来はいずれ地元に戻って働くことをこの頃に決意していたそう。その後海外留学を経て、ハワイに移住し、セラピストとして活躍。

日本の教育システムで子育てがしたいということと、ヨーロッパで日本の古くからの伝統を守ることの大切さを更に学んだこともあり、家業を継ぐため湯沢への帰郷を決意。地盤や信頼関係が厚いこの湯沢で、1870年(明治3年)創業、昨年150周年を迎えた鈴木又五郎商店を引き継ぎ、現在は事業を進化させていくことに面白みを感じている。

2020年から乳酸菌入りのあきたこまちを開発。玄米と白米を混ぜたブレンド米を、HAPARICE(ハパライス)という名前で販売している。「アロハスピリッツを秋田に」というキャッチフレーズにも見られるアロハとは、挨拶のみならず、思いやり・協調性・喜び・謙虚さを表す古代ハワイアンの教えとのこと。これが秋田とハワイの共通点だと感じているというB氏が次に手掛けるのは、あきたこまちの米粉でパンケーキを開発する事業と、雪国湯沢の雪で特産物を保存し、熟成させて販売するというもの。首都圏の消費者へ発信し地域活性化に貢献していきたいとのこと。

### (C氏)

羽後町出身・在住、株式会社 羽後麦酒代表。

大学進学のため上京。横浜にて靴の製造を修行し、ふるさと羽後町に帰郷した際、地元の魅力を見出せない人の多さを感じ、地域が抱える現状に危機感を覚えた。商工会青年部員として西馬音内盆踊りなどのイベントを陰で支えたりする活動をする中で、羽後町や秋田への愛着がゆっくりと漠然と深まってきたC氏。帰郷から約20年後、羽後町の地場商品を用いたクラフトビールを創る会社を起業し地域を活性化していくことを決意。

当初はクラフトビールの魅力と可能性について周囲の理解がなかなか得られない中、独学でビールについて学んだ。地道で誠実な活動が賛同者や出会いを呼び、実地研修などを経て、2016年10月、羽後町に株式会社 羽後麦酒を設立。工場は築120年の古民家のみそ蔵をリノベーション。設備を最小限にし、小ロットだからこそできる小回りが利く、お客様の要望に応えやすい商品を次々と生み出す。定番の「あきたこまち」を使ったビールや、地元秋田の食材である菊、ふきのとう、苺、ブルーベリー、桃、酒かすなどを

使った商品がある。

#### (D氏)

東京都杉並区出身で湯沢市在住。現在はシェアハウス運営や大学生のインターンシップ事業を実施。

幼少期には、お母様の御実家のある羽後町へたびたび訪れていた。高校卒業後アメリカへ留学し、ビジネスを学び帰国。大学在学時から地方で事業を立ち上げたいという強い思いがあり、第2の故郷と感じていた秋田県への移住を考え始める。

「どこで事業をやるか」という大事さはもちろん、「誰と一緒にやるか」という「人」が大事な判断基準となり、湯沢の「人」との出会いを通し、湯沢市地域おこし協力隊として活動。在任中は「事業参画型インターンシップ」による事業者の経営革新支援や、社会人の副業兼業支援、社会課題解決型起業支援を手掛け、人々を巻き込みながら地域のために日々活動した。

今春から、自身が移住した時に苦慮した経験から、移住を考えている若者の住居選びの一つの選択肢となるように、また、インターンシップ希望の学生を受け入れる環境を創出したいと、大学生中心のシェアハウスの開業にも取り組んでいる。現在は自身も学生と一緒にシェアハウスで生活をし、学生と地元企業をつなげたり、地域との交流機会を創るなど様々な面でサポートをしている。

#### (E氏)

埼玉県出身、湯沢市在住。フリーランスのフォトグラファーとして活動中。

高校時代にイギリス留学や、留学で得た友人の出身地であるイタリアへの旅などを経験し、ホストファミリーがしてくれた日常的で自然体のもてなしに極上のリラックスを覚え、観光地よりも贅沢なおもてなしであると感じた。高校卒業後はイギリスの大学で観光マネジメントやグリーンツーリズムを専門的に学んだ。

大学卒業後に埼玉に帰郷したものの、自身がアトピーで悩まされ、母の実家があった秋田であれば少しでも体が楽になるのではないかと、薬がいない環境なのではないかとこの期待を胸に、秋田に移住。秋田市の結婚式場でカメラマンとしての勤務や、五城目地域おこし協力隊での起業支援等を経て、2018年11月に湯沢市で行われた発酵イベントとの関わりを契機に2020年4月、拠点を湯沢市に移した。

同年11月には湯沢市では自身初の写真展を開催。現在はフリーランスフォトグラファーとして独立し、湯沢市のみならず、秋田県全域で活動をするなど、地域の皆様からの応援を受け、活躍の幅を広げている。

#### (F氏)

知事と同じ、仙北市角館町出身。現在は羽後町でy a d o & k i s s a U G O H U Bの代表を務めている。

中学校の頃、子どもたちに対して、良かれと思って現実的なアドバイスをする大人たちと接し、「大人って楽しいのかな?」「大人になりたいくないな」という感情を抱く。角館高校を卒業後、大学進学のために上京。卒業後は9年間社会人を経験したが、その時は「社会人生活は人生の消化試合」という感覚で仕事に就いていたそう。

2015年、秋田に戻る前に、ノープランで東南アジアに1か月滞在。「秋田と海外をつなぐ仕事がしたい」と、初めて社会人として実現したいことが自分の中に生まれた。秋田に戻りインバウンドに特化した旅行企画事業を展開する会社に就職。事業の一環で、羽

後町に関わりをもち、空き物件を本人と地域の協力者の力でリノベーションし、子どもと大人が遊ぶように生きることができる「宿泊」「飲食」「レンタルスペース」の三つの機能を持った複合施設であるUGO HUBを2020年4月に開業。大人が持つ資源であるヒト・モノ・カネが、子どもたちの夢や挑戦の投資になる、との強い思いで、これまでにない空間を創っている。

ここでは、地元のうまいものをここで食べてもらいたいと、有名店から秘伝のレシピを教わったり、土日は日替わりキッチン、県内起業者がイベントを開催できる場、大人も子どもも笑顔で集える場、話せる場、相談できる場をオーナーとして提供している。

## 意見交換（前半）

### （司会）

それでは、参加者6名の経歴を御紹介したところで、意見交換に入らせていただく。ここからは、1人ずつ、人生の決断をする上で、御自身なりの価値観について話をいただきたい。今まで住んできた場所での価値観の変化や紆余曲折、岐路に立った際に、どのように決断し、その結果、どうであったか。どうしてそこに住むに至ったかを、葛藤した気持ちも含めてお願いしたい。

### （A氏）

湯沢市三関地区で農業経営をしている。「私がそこに住む理由」とあるが、自分は奥山家の20代目として生まれたので、そこで農業をやるのが大前提だった。正直、幼い頃は農業が大嫌いだった。どちらかといえば、スーツを着てネクタイを締めて、やればやった分だけ稼げる営業マンのような仕事がしたかった。しかし、大曲農業高校で仙北平野、農業短大で大潟村の大規模農業を目の当たりにし、その素晴らしさを痛感した。他方、三関地区は、大規模集約農業とは違い、少ない面積にいかにか手を掛け、ブランド力を付けるかといった農業で、いわば真逆の農業形態だ。しかし、小さい三関地区には全国に誇れるブランドが二つもあると思う。サクランボとセリ、どちらも東京の有名百貨店に並ぶ、こんなに素晴らしいことはない。

その結果、大嫌いだった農業が、やればやった分だけ、手を掛ければ掛けた分だけ稼げるのが農業だと気付けたときに、これがまさしく、幼い頃から追い求めていた天職だと思った。

就農した2011年は、湯沢市が豪雪に見舞われ、農作物が甚大な被害を受けた。その時に支えてくれたのが若手農家、横のつながりだった。仲間がいたからこそ、今も農業を続けられているし、若手がいるからこそ産地が守れる。

2019年に設立した株式会社CRASの名前には、地域の農産物の頭文字や、地域と農業、自分自身を変えるという思いが込められている。これからは、産地の拡大ではなく、いかに維持していくかを、若手経営者と知恵を絞って考えていきたい。

### （B氏）

湯沢市出身で現在も湯沢市で暮らしている。代々商売をしている家系であるので、タイミングの良い時に湯沢に帰ってきて、仕事をしたいと考えていた。海外生活で培ったスキルを生かして新しい事業を立ち上げることも考えたが、0から1を作るよりも、今ある家業の1を10や100にするということも面白いのではないかと考え、家業を継ぐことにした。会社でもともと取り扱っていた米、酒、肥料などに付加価値をつけて、今までとは別のターゲットに販売していくことに取り組んでいる。

社員として会社の中から自社製品を見るよりも、少し離れた所から見たほうが、資源としての強みを見つけられることに気が付いた。これは会社としてだけではなく、地域づくりをしていく上でも同じであり、一度秋田・湯沢を離れたことによって、地元のことを資源や魅力だと思える力が身についた。勝手なミッションだが、まだ見つかっていない秋田・湯沢の資源や魅力を付加価値をつけて、外に売り出して行きたいと考えている。それができるまで、ずっとこの土地で暮らしていきたい。秋田県は宣伝が下手と周りに言われるが、逆にチャンスで、まだ見ぬ資源が隠れているということだと思う。

いつも物事を決断するときは、自分の心の中で「引き寄せの法則」がある。こうなりたい、とポジティブなワードを言うことである。あとは、勘もある。

#### (C氏)

私が秋田に住む理由はとにかく食べ物が美味しい、という一言に尽きる。全国的に見ても秋田のクオリティは高いと思う。

秋田に戻ってきた理由は、実家があり「戻された」というのが現実である。

帰ってきて十数年、靴の仕事をしてきたが、靴の技術はあっても仕事はないなど最も苦しい時、一番大変な時ほど次に展開することが良いことの場合がほとんどで、それを体験してきた。最悪な状況が今につながっていると考える。

学生時代に本を沢山読んだことで、物事を真逆に捉えたり、目の前の現実や常識が本当に正しいのかどうかを考えられる人間になってきたと感じている。その中で、「楽しむこと」「自由であること」を選択してきたように思う。田舎ほど、それらがたくさんある地域だと思っている。

#### (D氏)

昔から自分の実力を理解しないで、高い所に身を置きがちである。ここで引き下がれない、もっと前に行きたい、もっと上に行きたいと思った時に、周りと比べて自分に出来ることは何かを考えて選択して、それに集中してとといったことを繰り返して現在の自分があり、今の価値観を形成していると思う。

「私がそこに住む理由」としては、祖父母が羽後町に住んでいる点が大きい。自分の両親の世代は大学進学を機に、ここを出ることを選択したわけであるが、自分やもっと若い世代がここを出ないという選択をした時に、この町にはどんな未来があるか自分自身見ていきたいと思う。

湯沢に住んで4年になるが、シェアハウス運営のために住居に住み始めた途端大雪に襲われた。その時ご近所さんが雪かきを手伝ってくれた。雪が降って大変な地域だからこそ、雪の力が持つコミュニティは価値がある。これまで培った選択と集中の経験を生かしていきたい。

#### (E氏)

私がここに住んでいる理由は、まず母親が秋田市土崎の出身であること、そして自分自身がアトピーで埼玉に住み続けることが難しくなったからである。先程、選択と集中という言葉があったが、自分自身は選択を消極的なものとして捉えていて、どう楽に暮らすかを考えていた。最初はスーツを着て働きたいという気持ちがあったが、自分に体力がないということやストレスを無くしていきたいということを考え、現在はフリーランスで働いている。

現在、身体が楽でストレスも感じないし、食べ物も美味しいし、ここに住んでいること

は好きである。

(F氏)

幼少期から大人や社会人になることへの憧れが全くない子供であった。秋田には何にもないという想いと都会への憧れが強く、大学進学を機に上京した。秋田に戻るつもりはなかったが、東京で社会人生活を数年続けてみて、このまま東京に住み続けるイメージも沸かなかった。営業の仕事を経験しながら東京にいたが、東日本大震災を機に家族や秋田を気にかけることが多くなった。「秋田で楽しく働いている人」がいるかどうか確かめたく、お盆や年末年始などに帰省する度に、そのような人をインターネットで調べてアポを取って、話を聞いた。そして秋田への想いが強くなり、2015年に移住し、その後、縁あって旅行を企画する会社に入社した。

その仕事で羽後町と関わりができた。羽後町に住む理由として、羽後町の人たちが変化を楽しみながら受け入れるということを感じた。そういった価値観で生活している人たちと自分は息が合うと思い、それが決め手となり、羽後町に住み店をやっていこうと考えた。

(知事)

皆さん、素晴らしい。圧倒される。

#### 意見交換 (後半)

(司会)

ここからは「人」についてポイントをあててお聞きしたい。ここに住むという決断を1人で決めたのか、それとも誰かに相談したのかをお聞かせ願いたい。

(B氏)

自分の勘や、勉強してきた中での経験に基づいて、様々なことを1人で決断してきた。誰かに言われて行動しても、結局後悔する気がしている。

(D氏)

母親の教育方針で、相談しても「ダメ」と言われることが多く、相談せずに自分で考えて決断することが小さいうちから身につけていた。母がダメと言ったことも、祖母はいいと言ってくれることもあり、今振り返ると、祖父母のいる羽後町に居心地のいいイメージがあるのかもしれない。

(F氏)

秋田市の旅行会社で働いている時は、秋田駅前に住んでいた。秋田駅前は様々な面でも便利だったが、東京から戻ってきた時点で便利さには興味がなく、田舎に住んでみたいと考えていた。

仕事で羽後町に通う中で、一緒に住みたいと思える人たちが多く羽後町にいた。この人たちといると心地いいな、と確信したタイミングで自分で移住を決断した。

(C氏)

ここに住むということを決める決めない以前に、生まれ育った家があるということ、長男であるということなどから、戻らなくてはならないという植え付けがあり、いつか戻るだろうと考えていた。今考えると誰かに相談するわけではなく、漠然と1人で決断したの

かなと思う。

(A氏)

自分はAターンというわけではなく、秋田県から出たことはないが、家業を継ぐ想いがあり、湯沢市、三関が好きという気持ちで自然に今の状態になったところである。

(E氏)

小さい頃から母方の実家の秋田に遊びに来ることを楽しみにしていた。小中学校の同級生に秋田に移住するという話をしたところ、彼らは驚かず受け入れてくれた。その判断を下したことは、持病のために埼玉にはいられないということもあり、とても自然な判断であった。

(司会)

決断にも多様性があるということが分かった。大変興味深い。

次は「人との出会い」にもう少し着目したい。今の自分に影響を与えた出会いやエピソードがあればお聞かせ願いたい。

(D氏)

前の職場で働いていて、羽後町に移住しようと考えていたときに、当時湯沢市に勤務していた職員の方がいて、説得された。自分は祖父母のいる羽後町でシェアハウス等の事業を立ち上げるつもりだったが、「あなたがやろうとしていることは湯沢市でも必要としている」との言葉をいただき、またその職員の人柄、心意気に惹かれ、この人の周りや、住んでいるまちには面白い人がいるという期待を感じたのを覚えている。どちらかのまちを決断しなければならなかった時に、いつかこの人と仕事がしたいと思い、湯沢市への移住を決めた。

(B氏)

家業を継ぐと決めた時、外部のコンサルがほしいと考えていた矢先に、湯沢市ビジネス支援センター「ゆざわーBiz」がオープンした。そこで相談して、その後の仕事の道筋が見えてきたと感じる。

(C氏)

18歳から23歳くらいに出会った人たちからの影響が今の自分のベースになっていると考える。同業のビールを製造している仲間もそうだが、夢を持った変わり者が自分の周りには多く集まってきているように思う。

(E氏)

高校時代の2人の恩師が心に残っている。1人は倫理の先生で大変聡明な方であった。その方が「君は暗記はだめだから、他の生き残り方を考えなさい」と言ってくださった。はっきり言ってもらったことで、心が楽になった。

もう1人は世界史の先生で、とても熱意のある先生であった。何かやりたいと思ったことがあったらすぐに行動に移す弾丸のような勢いのある先生であった。

こういった人たちから受けるエネルギーのようなものが、自分に影響を与えている。

(F氏)

東京で最初に勤めた先の先輩に影響を受けた。会社を辞め秋田に戻ってくる前にその先輩と飲んだ時「急いで秋田に戻らなくていいのだったら、海外でも行ってきたら」と言われ、不思議な縁を感じ、その場で航空券の予約をした。行った先のタイで「海外と秋田をつなぐ仕事がしたい」と思い、Facebookに投稿したところ、秋田の旅行会社を紹介してもらうことになり、その後、羽後町と関わりができ、その人のお陰で今がある。

(A氏)

湯沢に生まれ、わざわざ大曲の高校に行ったのは、当時の担任の影響だった。

また、湯沢市ふるさと応援大使を務めている方にも影響を受けた。自分は地域の農業のために何かしたいと考えていたが、なかなか行動できずにいたところ、その方は「判断力、決断力、行動力が経営には必要だ。それが全て揃った時に何でも実現できる」と教えてくださった。自分が行動できたのは、その方が背中を押してくれたからである。

また、現在新商品の開発に取り組んでいるのは、知事のお陰である。数年前の意見交換会の際に知事から「湯沢市は漬物と酒とうどんしかない。新しい商品が必要だ。」と叱咤激励をいただいた。その言葉で農業で何ができるかと考え、新商品の開発にオール湯沢で取り組んでいるところである。

(知事)

秋田は農産物が豊かだが、どのようにブランド力を付けていくかが大事。

(司会)

これまでの話を聞いて、ここにいる人たちは、出会った人はそれぞれ違っても、吸収してそれを実行する力というのに長けていると感じた。感情論ではなく、冷静に判断しているということも共通していると感じた。

次は「価値観」について伺いたい。住んでいた所もしくは住んでいる所で自分が描いていたことが何%くらいできているのか、またできた要因や今後の展開のビジョンなどもお聞かせ願いたい。

(F氏)

UGO HUBのコンセプトは秋田県のこれからの担う10代が、周りの大人たちの人脈や経験、場合によっては金銭の提供を受けながら挑戦してもらえるとということである。レンタルスペースで1日単位で出店してもらう形式をとっているが、将来コーヒー店を開きたいという10代の人が今月末、初めての出店を控えているところである。他にも羽後中学校と連携をしてみようという動きもあり、試行錯誤しながら、少しずつではあるが当初のビジョンは達成しつつあると考えている。

(D氏)

パーセンテージでいうとまだ10%に達していない状況であるが、夏からもう1棟シェアハウスが稼働する。大学のない町で大学生が活動するということが徐々に浸透しつつある。まずは次の段階として、20%の達成率を目指していきたい。

(E氏)

自分はフリーランスのフォトグラファーとして活動しているが、水や空気、山といった

自然に着目している。木工職人や家具職人は注目されることが多いが、林業に携わる人はあまり知られていない。自分は自伐林業という方法で、山に関わっていきたい。

写真の収入だけではなく、自伐林業や農家の手伝い、雪下ろしのアルバイトなど環境の中に暮らしている生き物として、その環境を整備しながら、自分が伝えたいことを伝えるという暮らし方をしていきたい。現在は種から根が張りだした程度の達成度である。

#### (A氏)

「子どもがなりたい職業の第1位を農業にする」という目標をもっている。自分1人では産地を守っていけない。志を同じくする仲間をどのようにつないでいくのかがこれからの課題だと考えている。

#### (B氏)

海外旅行経験の中で、湯沢ほど安全でコストパフォーマンスのいい町は他にないと考えている。これを日本中、世界中に伝えるということが、自分の最終的なビジョンである。

湯沢市には資源はあるが、6次産業化されたものや加工品が少ないと感じ、「湯沢雪中協会」を設立した。雪の中に農産物や酒を貯蔵して熟成させたものを、雪のない地域の人たちに売り出していきたいと考えている。そのため、パーセンテージでいうと全然足りない。

#### (C氏)

自分は事業について二つのビジョンを持っている。

一つ目はビールという名目で旅をしたいということである。コロナ禍であるので、海外へ行くことは難しいが国内でも沢山の同業者がいるので、知らない町で酒を飲んでいる時に情報を得て、工場を訪ね名刺交換をするだけで技術的な情報を得たり、情報交換をすることができる。

二つ目は羽後から始まって秋田県全域の魅力を全国、海外に伝えていきたいということである。事業を立ち上げる時に「羽後麦酒」という名前はダサイと言われたりしたが、羽後を「羽後の国」と捉えると、秋田県全域を指す言葉になる。「羽後」から始まった魅力を発信していきたい。素材や食材は沢山ある。秋田を遊び倒せるような会社にしていきたい。

### 司会によるまとめ

本日は6名の参加者から「価値観」について話を伺った。自分はキャリアコンサルタントとしても活動しているが、その観点から参加者の価値観についてのまとめをしていきたい。

A氏は、結果を出すという達成、それと共に認められるという社会的評価、また頑張れば頑張った分だけ成果が上がるという経済的報酬ということに価値観を持っていると感じた。

B氏は、様々な人と接点を持てる社会的交流性、新しい価値や物を創出する創造性、美しい物を作る美的追求に価値観を持っていると感じた。

C氏は、自分が望んでいる生活を送るライフスタイル、そしてワクワクする体験・商品を作る冒険性、新しい価値・物を創出する創造性に価値観を持っていると感じた。

D氏は、自分の才能やスキルを発揮できる能力の活用、人の役に立てる愛他性、仕事環境の居心地が良いという環境に価値観を持っていると感じた。

E氏は、束縛を受けず自分の力でやってみるという自立性、スキルや才能を発揮できる能力の活用、美しい物を創り出すという美的追求に価値観を持っていると感じた。

F氏は、様々な人と接点を持てる社会的交流性、ワクワクする体験を望む冒険性、新しい物を創出する創造性に価値観を持っていると感じた。

このように6名の方々の話を伺っただけでも、これだけの価値観に分かれている。現代社会を見るとコロナ禍ということもあり、更に様々な価値観に溢れている。その価値観の多様性を認め合い、千差万別の生き方を認め合える社会を実現できれば、この6名のような地域に自信と誇りを持って暮らせる人が増えるのではないかと思う。

本日は自分自身も価値観の多様性について改めて認識した。このような機会を設けていただき感謝申し上げます。

## 知事総括

こういう形式は初めてで、楽しかった。今は社会の変革期であるが、その時に必要なのは、「素直」「人の言うことをよく聞く」「協調性」。勉強の成績だけでは意味がない。一方で、社会規範は必要。

今日集まった6人は、秋田の平均的な常識からすると、若干外れている。そういう人が沢山いるかどうかで変わってくる。これからも自分の流儀を通してほしい。

(C氏に対して) 県の「秋田の酒で乾杯条例」は日本酒だけでなく、ビールも含まれている。日本酒の本拠地である湯沢で、乾杯の半分がビールになれば、面白いのでは。

(A氏に対して) せりは、それだけで鍋ができる。(A氏が手がける) 新しい鍋を期待している。

(B氏に対して) 様々な経験をされてきたので、色々な取組を通して、周りを巻き込んでほしい。

(F氏に対して) 角館もそうだが、羽後も古くからの良いまちである。東北の大体中心であるこの地で頑張っていたきたい。

(D氏に対して) 様々な経験をされている。シェアハウスを通し、これからの若者と影響力を発揮してもらいたい。

(E氏に対して) フォトグラファーとして考えがあると思うので、地域と一体になりながら、個性を生かし、頑張っていたきたい。

時には地域と反発し、打ち克つ程の凶々しさも必要。一方、人間は1人では生きていけないから、ある程度の妥協も必要。そのバランスの中で、周りを変えていくのが良いのではないか。

今日は良いお話、ありがとうございました。(了)